

# ついに来た来た ホンジュラス！

2月3日

## 1月の算数の集中講習会

久しぶりの学級担任感覚をされてくれて  
ありがとう

やっと1月の算数の集中講習会が終わった。今までは先生方の授業がない日、つまり土日に行ってきた講習会だが、12・1月と2月の半は授業がないので1月に集中講義として行った。

18歳から52歳までの経験年数も様々な先生方だが、みんなよくも悪くも



ホンジュラス人らしいすてきな方々だ。私のスペイン語がまずくても「ミヨは何が言いたいのだろう？」と、何とか聞こうとしてくれたり、「ミヨの日本の家族へ・彼へ・友達へ」とか言って、『離れた国にいる人を想う歌』というのを歌ってくれたり、とても心優しい先生方だ。ありがたい。

しかもこれほど毎朝8時から先生方と顔を合わせていると、1年ぶりに自分の学級を持たせてもらったような気持ちになり、私の先生方がいとおしく可愛くなった。集めた先生方のノートを見ながら「やっぱり学級担任はいいものだなあ。」と、しみじみ思う。大げさではなく本当にそう思う。

途中、「東京のJICAから5人くらい視察に来る」などということがあったので、小心者の私はまるで学校の研究授業前のように緊張したり、トラブった夢を見てドキドキしたりもした。

先生方は授業中にコーラを飲んだりお菓子を食ったり、私が黒板を見てる間にこそこそメモメッセージをまわし合ったり、テストをすると自然に話し合いを始めるので「話し合わないで、考えて」と言うと、今度はみんなで力を合わせてカンニングしたり、1時間に2・3回ずつも「トイレに行って来ませう」と言って教室を出ていったり・・・。

また宿題で教材づくりを出すと、ある一人が作った物を何人もが貸し合いっこして私に「自分が作った」と見せに来たり、計算問題は丸写しし合ってみんなで間違えたり、なんとも可愛い(と言ったら失礼なのかな?)先生方だった。

しかし、遅刻してきた先生に理由を聞くと「今日は風が強かったから」とか、またノートを忘れて

いた先生に理由を聞くと「今日は雨が降っていたから」とか、あくまでも自分の非を認めないところが彼らしく、まるで『ハメハメ八大王』のようなことを言うからおもしろい。しかし模擬授業をしてもらおうと、どの先生もみんなキッと「先生の顔」になって、子ども役の先生を私もビックリするくらいの大きな声で叱りつけるから、その威力はすごい。

また授業中に外から「物売り」さん達がやってきて、教室に入ろうとする。私が「今は授業中だから入らないで欲しい。」というと「こちらも仕事でやってんだ。」と信じられないほど自己中なこと言って、勝手に入り商売を始めたこともあった。また講習会会場として市内の中学校を借りていたのだが、その校長先生も授業中だろうがテスト中だろうが、勝手に入ってきて長々と話を始めるのにも参った。

そんなとき私が「今は授業中です」と言って断っても、自己主張の強い彼らは自分のしようとすることは絶対に曲げない。『好きなときに好きなところで、好きなように好きなことをする』というのが彼らの行動基準なのだ。だから受講生の先生達も授業中だろうが休み時間だろうが、何か食べたくなれば買いに行って食べるし、席を立てうろうろしたり外に出ていきたくなったりすれば気の向くままに出ていく。それがホンジュラスなのだろう。いくら私がそれを疑問に思って尋ねても、「ミヨの言うように、それはよくないかも。でも、まあいいじゃん。」という答え。完全に彼らの理性は欲求に負けている。

しかしこちらが真剣に授業をしていればしているほど、そういった彼らのわきまのない言動が悲しくなるときもあった。しかしここはホンジュラス。仕方がない。

## 熱意の焦点

しかし彼らの熱意、特に評価されることについては何が何でも自分の有利に持っていこうとする熱意はすごい。

正三角形の形や三角すいなどの展開図は、描き方教えたのにもかかわらず、自分で描こうとはせず私の見本を取ってきてそのまま写し取ろうとする。「写さないで考えてね」と言うと「分かったよ。ミヨ」とニコニコしながら答えて、その後私の隙を見ては取ってきて写そうとする。写し取ろうとするのは、展開図に限らない。理解を深めてもらおうと思って作ったプリントも、一人を採点すると、その正答があつという間に他の数人に広まっている。写せるものは全てその対象になっている。

発言者とその数を、私がえんま帳に記録していたら、それさえも隙を見ては書き足そうとする。

また最終テストの前に、私がその正解を教卓の上に置いていると、物をわざとに落として「ミヨ何か落ちたよ」と私の注意をそらしておいて、その間に教卓に置かれた解答の正解記号を丸覚えしようとする。最終テストでは「話し合わないようにね。考えてね。」と言っておいて臨んだ。すると、自

由に席を座ってもらうと良くできる先生を中心にして、要領のいい人から順にその近くに座り、鏡反射方式で次々にその回答が広がるような場所を考えて座る。事前に私の正解から写した答えのカンニングペーパーは、靴の中や服の裏側手のひらなど、いろいろな所に隠し持っている。目を離すとすぐに話し合っただけを相談し合う。彼らは、ありとあらゆるカンニングの手を使って、不正行為でも点数を上げようと必死になっていた。

全く油断も隙もないといった感じなのだが、そうでもない。カンニングは少なからず私も通ってきた道だし、彼らのカンニング技術はそれほど熟練されたものでもないで、私にすればそれは手に取るようにすぐに分かる。

それよりも疑いたくなるのは、大の大人としての彼らの誇りと倫理観だ。「こんな、中学生で卒業したような幼稚なことを、大の大人になってまでもするのかい？」とってしまう。それは考えの浅かった青い中学生時代だからこそできたことで、それ以降は「そんなことしてまで、点上げてどうするんだ。」と、カンニングで点採っても「試合に勝って勝負に負けたようなもの」だと、子どもなりに私はそう思っていた。しかもカンニングとは、自分の良心に対する「罪悪感」と見つかったときの「恥」とを覚悟の上で行うハラハラした罪深い行為だったと思う。今、過去の自分のことをこうやって告白することだって、その罪の意識からこれでもけっこうな勇気が要っていることなのだ。

そんな気持ちがあるから、大人の彼らのカンニングや不正行為を指摘するのは、最初は気が引けた。しかし、彼らは私が考えるほど複雑でもなかった。私にそれを指摘されても、気まずく思った様子などみじんもなく、また次の日にニコニコと何度でも同じ事をするから、なんとも憎めない。そんな彼らの様子からは、カンニングに対する「罪悪感」と「恥」の意識を、全く感じるができない。

昔から日本人は、恥の意識はあるが罪の意識がないと言われるが、有る無しを言う前に、この恥と罪の意識判断となっているものが国によって違うような気がする。罪や恥は、国民の比較基準にはならないと思った。

それよりも私が残念に思うのは、評価ばかり気にして肝心の私が講習する内容を、なかなか身につけようとはしてくれないのだ。興味や関心を起こさせるような授業をしていない私が、悪いのだろうとは思う。でも一生懸命説明していても、風船ガムを口の中でパチパチいわせながらふらっと席を立ったり、休み時間の15分くらい前になると机の上を全部片づけて、鞆を胸に抱えてじっと待って座っていたりする先生方を見ると、悲しいのものもむなしのものも通り越して、何故かわらけてくる。かわいいなあ（失礼かな）と、笑うしかない。先生方の中に必要感と「できるようになりたい、知りたい」という関心がないのだろう。たびたびこの国での自分の存在意味と、やっていることの真価に疑問を抱いてしまう。

先生方はテストの時に話し合ったり、「質問です」と言って私を呼んで「3番はどれが正解なの？」とズバリ正解を教えて欲しいと言ったりする。私が「これはテストなんだから、ズバリは言えないよー。」と言うと先生はすねて見せる。その疑問についても、授業後の雑談の中で聞いてみた。すると先生方はそれがここでは普通だというのだ。学期末の最終テストでも、子どもたちが話し合ってもいいし、質問されれば答えも教えるらしい。

再び私は驚くしかなかった。ホンジュラスでは出席数さえ足りていれば無条件に進級できる日本とは違って、学期末の最終テストで進級者と落第者が決定される。だから1年生のクラスを見ても6歳の子どもから15・6歳かと思われるような大きな子も混じっている。だから同じ学年でも体格の差が大人と子どもほどもあり、バラバラなのだ。でもそれがここでは普通だ。何年も留年というのは人生設計の中で結構大きな出来事だと思うのだが、彼らにとっては特に何でもないのだろうか。しかしその留年を決めるテストがそんないい加減な環境で行われているとしたら、いったい何が留年の明確な基準になっているのだろうか。

### 失礼を承知ですみません

しかし講習会をして自分が伝えられたことよりも、ここでの問題点が見えてきたことや、自分を振り返る勉強をさせてもらったことの方が多かったと思う。その正直な感想を現場経験年数たかが6年ほどの（正式には3年なのかな）この小娘が身分もわきまえず失礼を承知で、ここでこっそり言せてもらおうとする。

いろいろあるが、算数云々という前に、まず先生方に文章や数字などの活字を読もうとする気持がない。またその読むという体験不足から、それを読みこなす読解力が驚くほど少ない。また写したり真似したりする楽な方法はいくらでも考えるが、自分の力で始めから頑張ろう努力しようという気持ちが起こりにくい。それらのことに問題の原点があると思う。

また算数上では、子どもたちに解答の方法を覚えさせたり教えたりするばかりで「考える算数」ということ、またそれからくる楽しさの意識がないこと。また先生方自身がそれを経験してこなかったこと。そして先生方自身に基本的・基礎的な段階の算数の力が驚くほど備わっていないこと。だから教えるときに自信がなくなり、自然に避けて通ろうとする。これらが大きな問題だと思った。

（こう書きながら、いかにも分かった風に言う私にも問題点が大ありだと、反省しております・・・。  
ハイ）

しかし、この国の実態や国民性つまりは子どもの実態を本当にはよく知らずに、外国人がその国の教育や授業法を述べるのはおかしいとは思ふ。しかしそれをよく知るのを待って何もしなかったら、

その間に任期の2年が終わってしまう。単なるポストモダンでは終わらせたくない。この国を外から見た人間として、私なりに微力ながらも客観的に問題点を見つけその対策を実施させて頂く。だがその中で必要性の取捨選択は、最終的にはこの国をよく知る先生方自身に任せるという方法がベストなのだろう。

1月の最終授業日は、何だか感動して泣けた。

### 国際銀行の援助によるこのプロジェクト

ちょっとここで、「どうしてこれほど先生方が評価にこだわるのか」に大いに関係するので、私たちが取り組んでいるこの講習会についてその全体像を簡単に説明したい。

今ホンジュラスでは国をあげて『基礎教育教員養成・研修プロジェクト（教員の学力・学歴向上プロジェクト）』を実施している。これは全面的な国際銀行（IBRD）の資金援助を受けて実施されている。昨年からスタートしたこのプロジェクトだが、今はまだ県下のモデル地域に指定された4県だけという特定地域での実施というスタート段階である。今なぜこのプロジェクトかということ、これが始まる十数年前から、各国がそれぞれで独自の教育分野への援助を行ってきた。しかし今後その効果を高めるために、それを系統づけ組織的なプロジェクトとして実施し直そうとしたのだ。

それは教員養成校の大学化、現職教員の資格向上を目的とし、具体的には中卒の学歴しかない先生方の中の希望者に、研修を受けてもらうことによって一気に大学卒業の学歴を持たせようとするものだ。そのための講習会は4年間にかけて、土日や1月から2月中旬までの学校の授業がない期間に講習会が行われる。内容は教育心理や原理などの専門教科よりも、国語や算数などの具体的な全科の講習会に重点を置かれている。

国語・社会はスペインから、自然科学はアメリカというように、各国が援助経験からそれぞれの援助得意分野を担当している。日本はこのプロジェクト実施以前から、十数年間にわたってここで算数教育の援助を行ってきた。その経験を受けて日本は算数分野の協力を担当している。その末端に、私のこの現場があるのだ。だから私が行っている授業は、そのまま大学の授業になっているということとで何とも恐れ多いことでもある。

しかし先生方が評価に必死になるのは、ここに理由があるのだ。これによって大卒資格が取れるか否かということ、つまりは給料の大幅アップがなるか否かということにつながっているのだ。この国では高卒学歴の学校の先生方が大部分を占めるため「最高学府」という言葉が意味そのまままだ生きている。だから大卒資格があるかないかで給料が大幅に違うのだ。しかもそれは退職後の年金にも大きく関係してくる。

しかも、これはモデル的なプロジェクトのため、一つでも単位を落とすとその単位を取るための講

義を何年後受講できるか定かではない。このプロジェクトが失敗に終われば、もしかしたらもう永遠にその講義は実施されないかもしれないのだ。だから一つでも単位を落とすと、大卒資格獲得計画の全てが終わりになってしまう。

年金といえばこのプロジェクトには、全教科に「40歳以下」という年齢制限がけられている。そのわけは、失礼にも対費用効果によるところだと、私は説明を受けた。しかし私が受け持っている先生の最高年齢は52歳。40歳以上の先生は2割いらっしゃる。規定通りに事が運んでいないのはいかにもホンジュラスらしい。しかし年齢が上の先生ほど、まじめに授業を受けてくれたり、受講生の先生方全体をまとめる役になったくれたりするので、私としてはありがたく大いに助かっていた。

しかしこのプロジェクトが始まって他の地域ではもはや1年で、2割ほどの先生方が意欲喪失で自主退学している。

前回11月末の時、出席数が3割しかなく、宿題の提出物も3割ほどの先生がいた。私としては、実は大卒資格獲得にはさほど興味がなく、それよりもこの講習会を受けてもらってそれぞれの学校での授業改善に少しでも役立て欲しいというのが本音だ。もちろん受講生の先生方も可愛いし大切だが、算数講習会の最終目標は、先生方にあるのではなくこの子どもたちにあると思っている。よって、ここで単位を落として講習会の出席への意欲をなくして欲しくない。だから私としては何とか彼を救ってあげたいと思ってハラハラしていた。「今のままでは危険です。一緒に宿題をしましょう。」と何度も言っていたのに彼の状況は改善されず、結局最終テストは彼は2割も採れなかった。公正な評価をしたいので仕方なく、いったん単位を落としその後補習を実施するという対応で、最終的には何とか単位をあげることができて私はホッとした。

しかしそのいったん単位を落としたとき、彼は猛烈な勢いで「どうして俺に単位をくれないのか！」と迫ってきたのだ。具体的に理由を説明したが、彼は出席できなかったのは「靴を洗って濡れていたから履けなかったからだ。俺のせいじゃない。」とか「宿題を忘れて取りに帰っていたら、もう時間がなかったからだ。」と、いかにもホンジュラス人らしいことを言う。しかし何が何でも退かない、あくまでも自分の正当性を押し通そうとするのは彼だけではない。ここではどこでもある、自己主張の強いそんな彼らの態度だから仕方がない。

ここに至っては何が権利で何が義務なのか、とも考えるが、少なくとも彼らは最大限の権利を主張して、最小限の義務を果たしているとはか思えないときもある。しかし彼らのこの、義務の前にいつも主張される権利と自己主張の強さ、ボーダレス化の時代において日本人も彼らと対等に渡り合うために、その生き残り自己中技術を学んでおかなければ、やられっぱなしになるのかもしれないと思う。(何というひねくれた私の考え・・・ごめんなさい)

しかし、そうしてでも先生方はこの大卒資格の単位が欲しいのだ。もちろんきれい事では食べていけないのだから、大卒資格獲得にこだわる先生方の気持ちも切実だとは思う。

## 他教科の講習会

ここコロナ県では県下に2カ所でこのプロジェクト実施しているが、この県で援助主の外国人による人的ボランティアが直接活動しているのは日本の算数科だけだ。他教科は資金だけの援助ということで、その運営などはその地域に任されていて、授業はその援助資金でホンジュラス人講師が雇われて行われている。

プロジェクトの運営規定として、授業時間なども決められている。8時から12時半までが授業で、途中10時から30分の休憩をはさむ。昼食の時間を1時間取った後、午後の授業は1時半から3時までである。当然それを守るのが当たり前と思って、私の方は講習会を行ってきた。

あるとき算数講習会の後、続いて他教科の講習会があるというので見に行った。しかし今回は開始予定の8時になっても、ちらほらしか受講生の先生方は来ていない。9時近くになってようやく全員そろい始めたが、まだ授業は始まらない。9時半頃になってやっとホンジュラス人の講師が来られた。授業が始まったようだが、受講生の先生方は教室を出たり入ったり、食べ物を買ってきたり「いったい何をやっているんだろう？」と、まるでずっと休憩時間のような感じだった。しかしその授業も30分ほど続いた後、10時から休憩に入った。受講生の先生方は全員食べ物を買っていき、持って帰ってきて教室で食べている。30分のはずの休憩が1時間たっても2時間経っても変わらず、そのまま昼休みに入った。結局午前中の授業は30分だけしかやらなかった。

午後の授業を見ようと私は2時過ぎに再び行ってみたが、どうしたこともうほとんど受講生の先生方はいなくなっている。もうすでに授業は始まっている時間なのだが、ある一角で昼食を食べながら楽しいおしゃべりと共に、のんびりと午後のひとときをくつろいでいる先生がいらっしやだったので聞いてみた。「あれ？午後の授業はどうなの？」彼女たちは「さあ。知らない。ないんじゃないの？いつもこんな感じだよ」という答え。

「う～。驚いた。」ある程度想像はしていたものの、私がやってきた算数の講習会とのあまりにもの違いに驚いた。

このいい加減さが普通のホンジュラスでの講習会スタイルなら、算数でやったような時間と提出物などの約束事を守る講習会スタイルは、先生方には相当きつかっただろう。私も大変苦労したが、先生の方がよっぽど大変だったのだろう。途中で「まあ、こんなくらい適当でいいか。」と、いい加

減に思ったときもあったが、今考えるとそう思ったのはよかったと思う。完璧にそれを求めていたら、私も先生方もパンクしていただろう。しかしまがりながらも、こんな得体も知れない外国人の方法によくついてきてくれたものだ。先生方に心から感謝したい。

しかし、私がやってきたことは特に厳しいわけでも何でもなく「あたりまえ」のことなのに……。だから社会生活上の一般常識を知ってもらうという意味で、ひとつ啓蒙にでもなったかと期待する。このままでは世界に通用しないホンジュラス常識の価値観の中に、微力ながらも一石を投じる役目にもなっていれば幸いだ。

しかし世界銀行の全面資金援助といって、このプロジェクトを実施していてもホンジュラスに任せっぱなしだと、末端の現場ではこんな状況なのだ。私のような若輩者が大学の講義をするというのも、恐れ多く恐縮なこと極まりないが、ホンジュラス人講師の授業ぶりには驚いた。いったい他教科の講師は、受講生にどんな期待をもって授業に臨んでいるのだろうか、いったいどんな公正な評価をしているのだろうか。もちろん時間的、形式的な問題で講習会の内容のことまで是非を推測するのは間違っていると思う。しかし、かといって最低限の時間が守られていない中、受講生を見ていても彼らの意欲が高まっているとか学習の効果が上がっているとかは到底思えないのだが。

こうしてホンジュラス人講師は、30分ほどの授業をして1日分の給料を世界銀行から受け取り、それを4年間続ける。せめてもののこれは無償援助に切り替えて欲しくないと思うのだが、今実際に無償に切り替えられた日本の援助資金も、結局今までこんな使われ方をしてきたものもあるのだろう。

しかしホンジュラスのことを一生懸命考えれば考えるほど、自分のやっていることが虚しく悲しく意味のないことのように思えてくる。援助という名の下にここに来た、私の存在意味が分からなくなる。

## 雨期に突入

1月に入ってしばらくしてから、約1ヶ月近く今日もずっと毎日朝から晩まで雨が降り続けている。北部特有の激しいあの雨ではなく、しとしとと、とぎれなく降り続く雨だった。家族に聞くと「毎年12月から2月はずっとこんな感じなんだ」と教えてくれた。いわゆる雨期なのだろう。しかし、今年は雨が少なくやっと1月に入って降り始めたということらしい。

今まで太陽がキラキラしていたのが、急に雲に覆われて雨が降り続くという天気変わった。まるで昨日までの気温が嘘のように涼しくなり、いや寒くなり、同じ土地とは思えないくらいの急変ぶりだ。

湿度が高いため、洗濯物は1週間も乾かないからカビが生えるし、ノートや本などの紙類は湿気で常に湿っている。以前に先輩隊員が「雨期にパソコンがやられるよ。乾燥剤をしっかりと入れて保管し

ておかないと。」と言っていた意味がよく分かった。

サンタルシアでは普通の雨でもひどい雨漏りだったので、そんなときは家の中で合羽を着て大きなビニール袋にパソコンを入れてパチパチ打っていた。

ここで私が住んでいる家は築2年目の新しい家なので、今までは「雨のカーテン」でも何ともなかったのだが、今回の降り続く雨には耐えられなかったようで、さすがに雨漏りがしている。しかし家族は慣れたもので、家のあちこちにバケツを置いて困った風もない。

算数の講習会のために借りていた学校も、すごい雨漏りだった。一時どこからともなくニワトリたちが3・4羽も雨宿りに教室へ入ってきたこともあったので驚いた。

前回このNO, 12を送るためにラセイバの郵便局へ行ったが、そこもバケツを5つも置いてすごい雨漏り状態だった。窓口の人に雨のことを話すと、「1月頃はいつもこうよ。」と平気な様子。「どうぞ手紙が濡れませんように」と祈りながら出したのだが、大丈夫だったかな？

しかし、水はよく出るようになった。今までは何日に一回出るかどうかという状態だったのだが、この雨期に入ってから毎日昼過ぎ頃に1時間ほども出るようになった。とはいっても、今まででさえ泥水だったのにますます泥が大量に混入して、見るからにドロツとしている。水溜のドラム缶を、そおっとのぞき込みながら「どうもこの泥で行水する気になれないなあ。これなら春先の学校の緑プールに入った方が、まだましだ。」なんて思ってしまう。

しかし、この雨期の雨でたまらなく気の毒なのは、土壁と椰子の葉の家に住む多くの人々だ。もっとも私が傍目に見て「気の毒」だと感じるだけで、本人達はどう感じているのかよく分からないが…。ソナゲラ市内やラセイバへの行き帰りに目にした、そういった家々は、普段でさえ崩れそうな家なのにそれが降り続く雨でますます傾いて今にも崩れそう。単なるつかえ棒のようでしかない家の柱はどれも傾き、屋根にしていた椰子の葉も柱の傾きと一緒に、ずれ落ちそう。その上ビトビトに濡れてしまって屋根の役目を果たしていない。土の床は粘土のようにドロドロになって滑りそうになっている。

しかも、実際に崩れている家もあった。「いわゆる『家が傾く』とはこういうことか」というような、まるで絵に描いたようなそのままの状態、見るに忍びないような家々になっていた。家を修復しようにも、毎日降り続く雨のためそれもままないのか、崩れた家の隙間でおばあさんが寝ていて子どもたちは雨に濡れながらバナナの木の下に座っていた所もあった。

「彼らは毎年雨期が来るたびにこんな状態なのだろうか」と思って、家族に聞いてみると「今年の雨はいつも以上に降り続けている。ひどく多い。」と言っていた。自然災害やこの世界的な異常気象、

これらは襲いかかる人を選ばない。しかしその被害を最も被っているのは、こうした一番弱い立場の人たちなんだろう。しわ寄せは末端の人からくる上に、その被害は貧困をますます増幅させているように思う。

水のカーテンも降りようによっては、私のように呑気に感動している場合じゃないと思った。

### あるカナダ人の見るホンジュラス

ラセイバのモールの中に一軒のアウトレット店がある。その社長はカナダ人なのだが、マイアミとバンクーバーなど合計五軒のアウトレット店を持っている。だから彼は店があるそれぞれの国を、家族と一緒にまわりながら住んでいるとのこと。また彼は、以前日本に10年近く住んで貿易関係の仕事をやっていたということで、日本語もよくできる。そうこうしているうちに仲良くなり、彼の家へ食事に招待されたことがあった。

社長の家はモールの近くの静かな住宅街の中にある。その住宅街は入り口には大きな扉があり、また警備員も常駐していて安全のために外界と仕切られている。それぞれの家にも高い塀とその上には普通の鉄条網だけではなく高圧電流が流れる鉄条網が張られ、厳重な警備がされている。

ホンジュラスでは、一般家庭や学校でも何段にも鉄条網が張られ他人が簡単には入れないように警戒された造りになっているのは当然のことである。日本のように、よじ登ればすぐに乗り越えられるような飾りの塀や柵ではなく、柵は本気で他人の進入を防ぐ目的で造られている。しかしこの住宅街の警備は一段と厳重だった。ここは、外国人やホンジュラス上層階級者の家々だということだそうだ。

### 国旗への感覚

彼の家へ入ってまず目についたのが、部屋に堂々と飾られていたカナダ国旗だった。それについて尋ねてみると「母国と離れてあちこちで生活していると、国が懐かしくなるんだ。それに子どもにも母国を意識してもらいたいしね。」だから国旗を飾っているとのことだった。私は「ほう～」と興味を持った。

私もここへ来て、初めて日の丸に何ともいえない熱い感情を抱くようになったということ、以前にも書かせてもらった。しかし、そのときは「日の丸を部屋に飾りたいなんて、私はどうかしている」と思って、その感情を打ち消していた。しかし、実際に今日の前でそれを実行している人がいる。

ここでは、ホンジュラス国旗を飾ったり国旗のシールを貼ったりして走っている車やバスをよく見

かけるし、町角や店先にどういう意味なのかよく国旗を掲げてある。しかし、ホンジュラス人の中にはかなりアメリカ合衆国様崇拜者が多く、ホンジュラス国旗を飾ってあるからといって愛国心がどうかとは思えない。だから、まだよく分からないが、彼らの国旗飾りは特に深い意味があるわけではなく、「自分の国の旗、だから飾る。」くらいの気持ちだろうかと思う。

しかし、もしもこれが日本だったらどうだろう。友達の車に乗せてもらって、その車内に日の丸が飾ってあったとしたら、友達の家へ遊びに行ったら彼女の部屋に日の丸が飾ってあったら……。そんなことをすれば、すぐに「え、右？」と、とりあえずワンクッションあるのは間違いないだろう。

考えてもみれば、私も含めて日本人は国旗に対して、どうしてこれほど異常なアレルギー反応を示すんだろう。過去の戦争との関連だろうが、そもそもどこも国旗というのはそれぞれの国を命がけで守り、戦ってきた人々の血や涙などの深い感情が染みこんでいる。日本ほど「国旗について安易に自分の意見を語るのは危険」という国民が他にいるのだろうか。

これがいわゆる『過剰な反省』の一つだと思う、ということ叱られるのだろうか。

## 対ホンジュラス人観

社長から仕事に関係して興味深い話を聞いた。日本語での会話なので辞書を片手にする必要もなく、安心して会話ができる。とても楽しかった。

彼はズバリ「ホンジュラスで商売を始めたのは間違いだった。」と言うのだ。私は苦笑しながら興味をもってその先を聞いてみた。彼が言う商売がしにくい問題点とは、大きく分けて二点あるという。一点目は、外国企業などに対する手続きなどの法を含めた政府の対応の悪さ、そして、二点目は従業員となるホンジュラス人の資質の物足りなさ、ということだそうだ。

一点目は普段は私が踏み込むことのない世界なので、興味深かったが初めて知ることが多かった。

日本やアメリカの役所では1時間もしないで済ませられた書類が、ここでは1ヶ月たってもできない。外国人営業の企業に対する、あらゆる税率が他の国に比べて格段に高い、ということだった。

二点目については、彼が言うには、まず仕事に対するホンジュラス人の認識の甘さだそうだ。

具体的には、時間や約束事に対するいい加減さや、物や電気などに対する節約感覚のあまりにもの無ささという。社長として彼がそれを指導すると、すぐ次の日から無断で仕事を辞める。店内の工事に業者を呼んでも、契約は守らないし仕事が遅すぎると。

また従業員の合計や割引など基本的な計算能力があまりにも足りない。彼が言うには「小学生レベルの算数から指導しなくてはいけないのでは、仕事にならない。」と。また彼は「教えようとしても覚えようという態度がないから、社員教育も嫌になるんだよ。彼らの頭の中には『アモール(男女愛)』のこことしかないんじゃないか？ ダンスなどの楽しいことは大好きだけれど、努力や忍耐のいること

には見向きもしないんだ。」と。

私はそれを聞いて驚きと納得のあまり「う～ん」と考え込んでしまった。欧米人らしい、いかにも歯に物を着せぬハッキリとした表現だが、私がホンジュラス人に普段感じている感情とほぼ同じ内容だったので自分の感覚は間違っていないと思わされた。私はここで日本人という物差しから、物事を見てしまっているのではないかといつも不確かな感覚と疑問をもっていた。しかし、彼の話の聞いてこれは日本だけの常識ではなく、世界の常識なのだったと改めて思った。

彼は私のように、食いはぐれのないボランティアなどといったどうにでもなる立場にいるのではなく、身に迫った仕事の現場でホンジュラス人に接している。それだけホンジュラス人に対する思いも深く、印象も切実なものになるのだろう。

でも「ホンジュラスは途上国だと最初から分かっている、どうしてここを商売の地に選んだんだ？」と聞くと、「上流階層を狙った。でも、一言で言えば『間違い』だったんだよ。時期を間違えた。」と。

彼は言っていた。「要はホンジュラス人自身が、向上しようという切迫感と熱意をもって努力しないと、いくら各国が援助しても100年後もここは同じさ。」と。

### 自助努力？

カナダ人の社長が最後に言っていた言葉の意味、最近私も同じようなことを考えるときがある。

日本のODA大綱の4本柱の一つに『自助努力の支援』というのがある。これを初めて聞いたとき、「上から見下したような、先進国主導構造の象徴のようななんて嫌な響きの言葉なんだろう。」と嫌気がした。しかし今になって納得するところがある。

村落開発の分野で派遣されている、あるホンジュラス隊員が話してくれたことである。

彼は村落開発の立場から、あるとき任地の小学校をまわっていた。貧しい家の子どもたちは、ノートや鉛筆類を用意することができない。

彼が行ったある学校では、教室を見わたすと大半の子どもたちが何も持たずにただ椅子に座っていた。先生と話すと、「ノート類があれば勉強の効果があがるのに。でも貧しいから買えない。」ということだった。子どもたちも、ノートが欲しいと言っていた。ちょうどその頃、彼の出身の大阪市が「少額だが何か援助として送れる物はないか。」とってきていたので、ちょうどいいと思いノートと筆記用具類を送ってもらうことにしたそうだ。

その後、何かのキャンペーンで配った残りという感じの広告入りだが、立派なノートが千冊ほどと

鉛筆消しゴム類が送られてきた。彼はそれを持って学校へ行き、子どもたちと先生に、これは日本の好意で送られてきたこと、勉強するために大切に使おうという話をして配った。大切に使うってもらうために、その場でノートに名前の書ける子には書かせた。喜んでいる子どもたちの顔を見て、彼も満足だったようだ。

しかし、驚いたことにその日子どもたちが帰った後の教室には、今さっき配ったばかりのノートや鉛筆類がいくつも転がっている。破られたり踏まれたりしているものもあった。彼らのさっきの喜びは一瞬のことで、もう忘れられているかのようだったようだ。

次の日、学校に行ってみると昨日配ったノートを用意して勉強している子は、もう誰もいなかった。今までの授業中同じように、何も持たず、文字も書かず隣の子とおしゃべりをしながら、ただその時間を過ごしているだけだった。

彼はそれを見て愕然としたと同時に、今まで他でも感じてきたボランティアの限界を改めて感じたようだ。私もそれを聞いて、なるほどと偉そうながらも一種悟ったような気持ちになってしまった。

「ノートと筆記用具をもらったから、よし、これでしっかり勉強できるぞ。頑張ろう！」なんてほどは思わないにしても、せめて「好意でくれたものだから、大切に使おう。少しはこれで勉強しやすいな。」ぐらいの気持ちになってもよさそうなものだが……。しかしその前に、国民一人一人にこちらが期待していたような勤勉さと向上心、そして物を大切に使う感覚があれば、これだけ援助漬けのこの国はもっと以前に発展している。

今ごろになってやっと分かってきたのだが、要はODAがいつている『自助努力』なのだ。

私は日本にいるとき、途上国のことを想像して「途上国では物が無いから、みんな物を大切に使っているんだろうな。日本はこんなに、使い捨て浪費社会でいいのかな。」と想像していた。また学校では、毎年教室に出てくる鉛筆や消しゴムなどの大量の落とし物、これも物があふれている日本だからこその現象なんだろう、と想像していた。

しかし、ここへ来てそれはとんでもない誤解だったと分かった。水や電気をはじめ、物に対する無駄遣い感覚は、意外にも日本とは比べ物にならないくらい、こちらの方がひどい。

また、私は「算数教育向上」という名目で県や市教教委に派遣されたためか、あまり経験しなかったが、企業や研究機関に配属された隊員は、赴任後まず最初に「あなたは何を買ってくれるの？」と聞かれるそうだ。隊員とは『鳩がネギをしょってやってくる』ようなもので、現地の人々が欲しいのは人的援助の隊員などではなく、実は「隊員を通して日本の予算で買ってくれる高価な機材」ということらしい。

以前から聞いていた『援助慣れ』の意味が、今頃ようやく分かってきた。一度、各国が全面的に援

助から退く時期をつくらないと、いつまでたってもここの国民の意識は変わらない。酷なことかもしれないが、本当にホンジュラスのことを考えれば、それが最善なのではないかとさえ思う。

アメリカ社会の噂を身近に聞いて、彼らはあのような物質的な豊かさには憧れているが、それに対して「努力」や「忍耐」はことごとく避けて通ろうとする。そんな彼らをいつも見ていて、私はやるせない気持ちになっていた。各国の援助という名目の裏に含まれた市場原理上の思惑が、長年の間に彼らをそうされてしまったのか。

しかしお遊び事ではあるまいし、純粋な人道的考慮だけで国際協力ができるわけもない。朝から深夜まで残業手当などないに等しく、過労死と紙一重になりながら自分の時間を削って、ホンジュラス人には想像できないほど必死で働く日本人から搾り取った血税に支えられている、この援助資金。だから何らかの形で国民に返るものであって欲しいと、裏を考えるのは日本だけではなく世界中同じなのは当然だろう。

開発学というか開発教育は、歴史的な経験をふまえて現在はPCMやPRAなどと呼ばれる参加型手法が主な方法になっている。私のような援助を進める側は、本当はファシリテーター的な立場に立ち、援助される側の人々が主役になって、自発的に動き出すような援助方法がよいというのが、最新の考え方だそうだ。そんなこんなの端くれをここに来て知ったのだが、この参加者主体という考え方は、日本の今の児童の興味関心・実態主体という考え方にも共通していると思って、興味深かった。この「実態に合わせた」というのは開発だけではなくその他のいろいろな分野での、世界的な現在の共通の考え方らしい。

しかしあまりにも、偏りしすぎてはいないだろうかと思ってしまう。開発教育と初等教育は根本的に違うとは思いますが、国の歴史や国民性に関わる開発教育は、安易に外国人が手を出してはいけない域ではないだろうか。それが、自我の確立がなされていない若い年齢に関わる教育ほど、その外国人の関わる危険性が高いと思う。

しかし、念のため600万人のホンジュラス国民全てがここに書いたような有様だとは、さすがに思わない。単に明るく情熱的な人柄というだけではなく約束ごとに対しても誠実で、信頼できるホンジュラス人もこれだけ多くの人と出会った中で、まだ2・3人しか感じられないないが、他にもいるはずだ。ただ私が日常的に感じること、また隊員達の話から着色なく正直にとらえて、以上のようなことだというわけである。

しかし、他の隊員の意見を含めているとはいっても、所詮私の文章だし客観的に見たいと心がけていても、どうしても個人の感性の域を抜け切れていないところがあるかもしれない。だから、当然以上のことはその時期の一個人の経験をもとに、勝手に思いこんだことを綴っているに過ぎないことか

もしれないことを念のため断っておきたいと思う。

などと書きながら、一方ではそれは私の単なる「逃げ」と「甘え」ではないかという気もする。

こんな私の個人的な、しかも大した文章でもなく、何度見直していても誤字脱字だらけのこの『ホンジュ

ラス便り』でも、文字にすれば多少なりともその責任は生まれるだろう。以前にも私は、「これは<sup>いち</sup>個人

の  
日  
記です」「<sup>いち</sup>ボランティアが感じたままの、素直な印象です」と、断ったことがある。しかし、「いつまで

もそんなことを言って逃げていていいのかな」と、ずっと考えていた。

この中には、私の素直な印象や考えをそのまま書いてあるがために、ホンジュラスやホンジュラス人に対してかなり失礼極まりない内容もある。それに対して、責任を問われたとき「私的な考えです」と、その責任から逃げるために、私はそう弁解していただけたように思う。しかし、さんざん書いているのに、それはいつまでも通用しないというか、それよりもこのままでは自分で「私ってずるいなあ。」とってしまう。だんだん、そのごまかしが自分の中で耐えられなくなってきたので、もう「一人の～」とか「ボランティアの～」とかの曖昧表現は、これ以降書かないようにしようと思う。

かといって別に何も目に見えて変わるわけではなくて、ただ自分の中に「覚悟」ができただけ、ということなんだけどね・・・。

2月5日

### 自分の危機管理意識

1月にソナゲラの市役所前で警備員が二人、夜中に銃殺された。家族にいわせれば「警備員とはそういうものだ。分かって警備員になったんだからいいんだ。」と、いつものように悟りきったように言う。

また、私にとってはかなりショックな殺人事件があった。テグシのJICA事務所に出入りしていた、JICA指定の換金屋のおちゃんが殺されたのだ。連絡もなく約束を先延ばしして困らされたことはあったものの、ホンジュラスではそれは彼に限ったことではないので別にいいとして、小太りでいつもニコニコ笑っている気のいいおちゃんて親しみやすい人だった。彼は換金の依頼を受け、その現金を持ってJICA事務所へ向かっていたところ、事務所近くで銃殺された。事務所へ出入りする換金屋の事情を調べた上での、金銭目的の計画的な犯行だった。

この事件を受けて、換金のシステムがより面倒になった。しかしそんなことよりも、私にとって知った仲の人が殺されたのは今回が初めてで、犯人に対して言いようのない怒りがこみ上げてきた。「それがもっと身近な人だったら・・・」と思うと、仇討ちが御法度でなかった意味が分かるような気がする。

以前にカナダ人の社長宅を訪問したとき、彼所有の拳銃2丁と政府発行の拳銃所有証明書を見せてもらった。当たり前だが本物の拳銃だった。生まれて初めて手にする本物の拳銃の感覚は、それをよく形容される表現そのまま「ずっしりと重くて黒光り」していた。彼が言うには「自分の身は自分しか守れない。家族と自分を守るために、これは手放せないんだ。」と。しかしこんな重厚な拳銃が身近に存在するんだと思うと、あらためてその潜在威力の大きさを感じる。ゴルゴ13でなくても「私、いや・・・俺の後ろに立つな」と言いたくなる。

ホンジュラスに来てから私は、かなり環境に対して用心深く慎重になった。ホンジュラス人を信用しては裏切られるということを繰り返し人間不信に陥り、実際の悲劇現場を見聞きする経験の中で、安全なぬるま湯の中で育った私は、やっと本能社会の厳しさを知り始めた。(まだまだ甘っちょろいと思うが)

協力隊員は自衛のためといっても拳銃などを所有すると、その民間人としてのボランティア趣旨に反するからその所有を許されていない。しかし、その代わりにJICAからは訓練所時代を含めて、念入りに安全対策への訓練や講習会なり、注意喚起なりを行ってもらっている。

12月中旬にJICAから出された『年末年始の注意喚起について』の文章の中に、苦肉の策というか面白いのがあった。「4, 我が方安全管理課長によれば、テロや一般犯罪に巻き込まれるリスクを回避する暮らしぶりとは『自宅で腕立て伏せや腹筋、読書等に励み、家族や友人との語らいを大切に暮らし』となる。」その意図は分からないでもないが、銃火器武器を前にして腕立て伏せと腹筋の体力づくりとは、しかし多少意味はなすのだろうか。またこの環境にしながら部屋に閉じこもり「読書に励む」というのもどうかと思うが。いや、そもそもこのソナゲラの外界と空気の入れ代わりがない閉ざされた世界のいったいどこに、情報を含め本などという、高価貴重な御品物を手にできる環境があるのだろうか。言われなくともこちらこそ、情報や読書に励めるほどの量の本は喉から手が出るほど欲しい。

結局のところ、以前に日本大使館の医務官が言っていたように「途上国で病気にかかるか否かは、教養の問題だよ。」つまり「事故に遭うかどうか、自分の危機管理意識の問題」ということだろう。ここに限らずカナダ人社長が言っていたように「自分の身は自分で守る。」この原則はいつでもいえることだろう。

うちの一族の子どもたちと話をしているときのこと。「ミヨは日本へ行っても、またここへ戻ってきてくれるよね。」聞き、と哀願するような目で彼らは私を見つめた。「もちろん。戻ってくるよ！でも、まだ私はここに、後1年と1か月もいるんだよ。まだまだ先の事だよ。」と私が言う。でも6年生のうちの息子は、下を向きながら「でも、早いよ。」とポツリ。彼は1年なんてあっという間に過ぎてしまうと言うのだ。他の子どもたちも「ミヨはどうしても日本へ帰らないといけないの？」とじっと私を見つめて言う。彼らのその言葉を聞いて、私は胸が詰まった。子どもの飾らない言葉は、本質を突いていてズキンとくるときもあるが、大げさではなく、それだけ純粋な気持ちにさせてくれる。そんな、子どもの持つ天使パワーは、日本だけではなくこの国でも同じようだ。

私は以前の阪神大震災のとき被災地でボランティアをしたが、そのとき『ボランティアこそ最大の自己満足』だと思った。ここに来てそれを裏付けられたような気がする。私がここでどれだけ考えても、悩んでも

、もがいても、どれほどこの国のためになっているのか。大海の<sup>いちそく</sup>一粟にもなっていないだろう。そんなこと

初めから分かってたじゃないかと言われればその通りなのだが、それでも私は一縷の望みをもってきた。それが私の甘さなのだろう。しかし現実がよく分かったような気がする。

しかし「家族のこのかわいい子どもたちのために、私のこの活動と存在が虚しいと思わず、悲しいとも思わず、できるだけのことをして一生懸命あがいてみよう。例えそれが全く無意味でも。」彼らの小さな目は、くじけそうな私の気持ちを切り替えさせてくれた。そして、素直な愛情で接してくれる、罪悪感のないソナゲラの人達のために。しかし、最大の自己満足のボランティア、最もボランティアをされているのは当の本人、私なのかもしれないが・・・。